

## (基礎) 教育学コース文芸部立ち上げ、文芸雑誌『恐るべき大人たち』第一輯刊行

島 本 篤

### 1. はじめに

「世界は言語がなくとも成立する」とは言いうるかもしれないが、「概念は言語がなくとも成立する」と言うのは難しいかもしれない——とりわけ、概念が言語で把握しようのようなものである限りにおいては<sup>1)</sup>。仮に、「言語がなければ概念は成立しない」のならば、概念にはどこまでも虚構、あるいは幻想といったものが含みこむことになるだろう。

ボルヘスが「記憶の人・フネス」で示したのは、忘却と捨象がなければ、概念も思考も成り立たないということであった。アンコウは数百種に分類されるようだが、私が水族館で数種のアンコウを見ても、その区別をつけることは難しいかもしれない。せいぜい、このアンコウはさっき「カッコウ」と勝手に名づけたアンコウと同じ個体だと識別できるだけかもしれない。他方で、フネスのようなあらゆる細部を記憶している者にとっては、「カッコウ」という名前を持つアンコウの個体が19時12分と19時13分とで同一の「カッコウ」という名前と呼ばれることが驚くべきことなのだ。逆に、魚を一度も見ただけがない者はアンコウとキンギョを別の種類だと区別せず、同じ「魚」として認識するのみかもしれない。

概念は細部の捨象と忘却によってのみ成立する。細部を見ないことで、同一の要素を抽出し、同一の枠組みとして捉えることが可能となる。これはすなわち、概念には虚構が含みこんでしまうということでもある。そして、その操作に寄与している一つが言語なのである。

学問（その中でもとりわけ哲学）は、何らかの言語を用いつつ、その概念-虚構性に迫るという営みをその一部として含んできた。

ところで、虚構（時に概念-虚構性）に、言語、あるいは文字と空白を用いて迫ってきた営みは学問だけではない。

そして、基礎教（育学コース）文芸雑誌『恐るべ

き大人たち』第一輯に収められた小説、短歌、エッセイ、あるいは今後、この雑誌に収められうる詩、歌、脚本等もまた、そうした営みの一端として位置づけうるものである。

本活動報告は、その文芸雑誌『恐るべき大人たち』第一輯刊行、及びそれに先立つ基礎教文芸部（東京大学（基礎）教育学コース文芸部）立ち上げに関する活動報告である。

### 2. (基礎) 教育学コース文芸部立ち上げと雑誌第一号刊行

そもそも、この活動の発端を迎えれば2023年の夏に突き当たる。基礎教育学コース事務局（教育学コース事務局）で、雑誌第一輯・編集者の寺道氏と私（稿あつし（島本篤））とで盛り上がったのである。その頃、寺道氏は既に、彼が関わっていたところで雑誌という形で詩集を出していた。私も小説を長らく書いていて、せっかく関心のある人がいるのだから、基礎教として文芸や文学関連で雑誌などを出せるといいですね、と話していた。

雑誌名『恐るべき大人たち』の由来は、コクトーの『恐るべき子どもたち』。私が従来の小説・文学で教育や子どもとかかわりそうなものを挙げていき——ウィリアム・ゴールディングス『蠅の王』、コクトー『恐るべき子どもたち』、灰谷健次郎『兎の眼』、それからルイス・キャロル……——その最中、寺道氏が「恐るべき大人たちはどうでしょう？」と提案したのだ。私は即座に「それはいい！」と応えたのを覚えている。

こうして雑誌名だけが決まり、「いつか」という時間と計画の捉え方で、刊行の可能性が生まれた。

コース事務局で話していたわけなのだが、事務所の小林さんもこうした試みを強く好いてくださり、「学部生でも小説を執筆している人がいて、機会があったらぜひ話してみて」というようなことも度々、伝えられていた（現メンバーの一人である大

屋氏)。そうした話があって、小説を書いてみたい／書いてみたという話を私が聞いていた片山氏、東大の文学サークルに所属していた(P.N.) 沢野氏、といった今のメンバーに声をかけ、2023年の12月半ば頃、雑誌一号をその五人のメンバーで作ることが決定したのである(つまり、本活動報告でも「文芸部」と表記しているが、元は「(基礎教にかかわるメンバーで) 小説や詩などの文学・文芸雑誌を出す」目的で集ったのであって、「部(活動) なるもの」として活動することは当初の念頭にはなかった。そもそも「部(活動) なるもの」がコースとしてどのように規定されているのか、そのような規定があるのか、いまだに明らかではない面もある)。

初回ミーティングは2024年1月18日。初回も含め、1-4月で対面・オンラインのハイブリットミーティングを6回行う。必要に応じて、LINE上でもやり取りを行う(LINEのグループ作成は2023年12月18日、この「形」を以て活動が本格化したように思う)。内容としては、雑誌や活動の方向性や目的、雑誌一号の内容、刊行計画、依頼する印刷所や価格等々の相談、五月祭・文学フリマの出店/出展関連、SNSの運用等が主なもの。価格や印刷部数については、五月祭や文学フリマでどれだけ売れる見込みがあるのか、そういった側面から活発な議論が起こる場面もあった。

雑誌一号第一刷の刊行は2024年3月(届いたのは3月18日)。第二版増刷の部数を決定したのが4月である。『恐るべき大人たち』第一輯は、編集や体裁、目次の文章等は寺道氏が全面的に担当し、表・裏表紙は稿あつし(島本篤)が担当。それぞれの作品として、小説は沢野氏の「兄弟」、大屋氏の「ヴァーチャル世界の殺人」、稿あつし(島本篤)の「穴あきファンタジー」、「鉄の惑星」、「平和日和」、短歌として沢野氏の「帰宅短歌」、「そういう王国」、エッセイとして片山氏の「鹿角ラボという挑戦」となった。雑誌としてテーマを統一した作品を掲載することも案としてあったのだが、各々が載せたい作品を載せることを優先したいということもあり、「教育にかかわっていればなお良しだが、大前提としてなんでも良い」という方向性で雑誌一号は刊行された。将来的に、号によってはテーマ毎の募集もありうるが、大枠としては「どんな作品でも」掲載するというのが、少なくとも現状の方針である——ジャンルとしても、「論文とまではいかないが書いたも

の」など、幅広い掲載を行っていく予定である(寄稿していただける方や活動のメンバーは随時募集している)。第二号は次の駒場祭、次々回の文学フリマ東京が2024年秋-冬頃にあるため、その時期を目指して刊行する予定である。

今後は、学祭や文学フリマでの販売が中心的な活動となる見込みである。また実現可能性は不明だが、学会や書店への持ち込み、企画(哲学対話や出版後の対談)の開催、企画の模様や対談内容等を動画上やSNS、noteなどのブログで公開していくことが案として挙がっている。

### 3. おわりに

「はじめに」では、概念-虚構性に迫る試みが学問だけではないこと、物語や文芸作品もその一端を担ってきたことを述べた。

英米の哲学では論文集の中に小説が載っていたりする。例えばKane, R., (ed.), *Free Will*. 2002. では、自由と決定論関連の論文の中、スキナーの小説 *Walden Two*. 1948. からの抜粋が冒頭に掲載されている。ニーチェやサルトルはもちろんのこと、学問と文芸とにまたがる、またはその境界で書き続けてきた著者たちを挙げればキリがないだろう。あるいはロシア文学やフランス文学を始めとして、従来の小説や戯曲、詩などにおいて、当時の思想、哲学、政治、経済が登場人物たちによって論じられていたりする。

言語を用いた営み自体に、虚構/幻想は必ず含まれてくると言える<sup>2)</sup>(概念は信じることと疑うことの接点でもあるのだ)。そうであればこそ、教育学や哲学といった学術界が、論文という形式だけでなく、よりおおびろげに虚構を(も)扱う物語、文芸という手法(はたまた漫画やアニメ、ドラマ、絵画等でも良いだろう)、あるいは一部の哲学者も好んだエッセイといったような手法に、もう少し目を向けても良いのではと思う時もある。

ところで、このようなことや冒頭で述べたようなことを、基礎教文芸部立ち上げの際に考えていたわけではない。この活動記録を執筆するにあたって、私一人が事後的にこの活動の解釈としてなされうる解釈を割り当ててみた……その試みの一つである(メンバー間で共有された見解というわけでもない)。そもそも私自身、そのような意図をもって小

説を執筆してはいない。

それゆえ、本活動や本雑誌を、虚構性へのアプローチとして位置づけることも可能ではあろうが、必ずしもその必要はない（少なくとも、私も含め、メンバーがそうした意図でもって作品を執筆しているわけとは限らない）。

ただ、この『恐るべき大人たち』のような雑誌だからこそ、現代において為しうることもあるだろうと、私は思っている。

## 註

- 1) もちろん、「前・概念的」と呼びうるようなものは言語がなくとも成立しうるかもしれないし、そのような形で通常、我々（や他の動物）は物事を把握しているかもしれない。例えば、犬は何らかの形で「従う対象」として相手を捉えている、と言いうるかもしれない。あるいは、人がドアを開ける際に、「『今』、『ここ』に『ドア』が『あり』、『ドアノブ』が『あり』、『私』の『手』が……」といった形で言語化、ないし意識して行為していない（しかし、そのように言語化すること自体は潜在的に可能である、とひとまずは言える）。
- 2) とはいえ、それが即「意味のなさない営み」であるということにはならない。スミランスキーは自由や責任といった概念の幻想性に焦点を当てた（W.ジェイムズが宗教的経験・信念について指摘した側面も参照されたい）。あるいは「すっかり虚構」と「ある程度虚構」と「できるだけ虚構を排しようとしつつも入り込む虚構」とは異なっているかもしれない。

